第49回城戸賞応募作品

# 『わが友』

尾ヶ井　慎太郎

〈あらすじ〉

１９４８年、津島修治（太宰治）は、遺書に「井伏さんは悪人です。」と書き、愛人の山崎富栄と共に入水自殺をする。師匠の井伏鱒二は、本当に自分は修治の友だったのかと苦悩し、弟子との過去を振り返る。全ての始まりは１８年前、修治が井伏に手紙を送ったことがきっかけであった。弟子にしなければ自殺すると井伏を脅し、強引に師事することになる修治。だが、小説は全く売れず、大学は落第、仕送りは酒に浪費し、おまけに就職まで失敗し、修治は失踪する。そんな弟子を新聞広告まで出して必死に探す師匠の姿に修治は心を打たれ、自殺を止める。

それから５年、遂に修治は作家デビューを飾るも鎮痛剤中毒になってしまい、井伏の説得により精神病院に入院することになる。それに加えて妻が不貞まで働き、修治の生活は荒んでいく。見かねた井伏は修治を河口湖に連れて行き生活を改めさせ、見合いまでさせる。修治は結婚を機に人生をやり直すことを決意し、次々と小説を書き上げていく。そんな折、太平洋戦争が勃発し、井伏はシンガポールへ徴用される。一方の修治は肺病で徴用免除になり、日本に取り残される。

終戦後、井伏が東京に戻る頃には、修治は押しも押されもせぬ人気作家になっていた。それゆえに不安や孤独を抱えるようになり、先輩作家との確執や家族との不和など、問題を抱えていく。再び荒れる生活の中で修治は戦争未亡人の富栄と出会い、お互いの心の隙間を埋め合う。遂に堪忍袋の緒が切れた井伏は修治を叱るが、逆に修治は井伏を拒絶する。税金の滞納や、増え続ける小説の依頼、家庭と愛人との二重生活、そして結核の悪化など、修治は制御不能の状態に陥る。それでも井伏は修治を助けようと、河口湖での病気療養の旅行に誘う。修治は井伏の思いに心を打たれるも、富栄と共に去っていく。

修治の葬儀後、井伏は先輩の佐藤に逆説的

表現を好む修治の『悪人』は最高の誉め言葉だと教えられ、救われるのであった。

〈登場人物表〉

津島修治（21、26、27、32、38、39）　小説家太宰治
井伏鱒二（32、37、38、43、49、50）　小説家
井伏節代（18、23、36）井伏鱒二の妻
小山初代（23、24）　修治の最初の妻
津島文治（38）　修治の兄
石原美知子（26、34、35）　修治の二番目の妻
石原くら（64）　美知子の母
津島園子（6、7）　修治の長女
正樹（2、3）　修治の長男
祐子（1）　修治の次女
山崎富栄（27、28）　修治の愛人
野平健一（23、24）　新潮社の編集者
古田晁（40、41）　筑摩書房社長
佐藤春夫（44、55、56）　小説家
中村たかの（18）　天下茶屋の従業員
鶴巻幸之助（60）　千草の主人
男性教諭（35）
検視医（30）
小料理屋の女将
面接官1
面接官2
漁村の女性（70）
巡査（35）
司会者
茶店の女店主（75）
女性客（70）
車掌（30）
カメラマン
郵便配達人
軍医
弔問客
中年男性
本屋の店主
千草の客
葬儀司会者

○玉川上水に掛かる橋（早朝）

T「１９４８年６月１９日」

降りしきる雨の中、傘を差した男性教諭（３５）が小さな橋を渡っている。

ふと下に流れる川を見て、川岸の杭に引っ掛かって揺れている男女の水死体、太宰治こと津島修治（３９）と山崎富栄（２８）、を見つける。

男性教諭は驚き、欄干から身を乗り出してよく目を凝らす。

修治と富栄の体は、腰に巻かれた赤い紐で結ばれている。

○井伏家・書斎

机に向かい、白紙の原稿用紙を前に筆が進まない井伏鱒二（５０）。

横目で傍らに置かれている新聞を見る。

『太宰治氏心中か　愛人と家出　玉川上水に遺留品』の見出しと共に、修治と富栄の顔写真が掲載されている。

さらにその記事には、『井伏さんは悪人です。』と殴り書きされた修治の遺書の写真も掲載されている。

井伏、新聞を手に取り、神妙な面持ちでその写真を見つめる。

節代の声「あなた」

井伏、ハッとして、後ろを振り返る。

蒼白な顔の井伏節代（３６）が、入口に立っている。

節代「太宰さんが……」

井伏、その一言で全てを察し、衝撃で固まる。

○玉川上水

水辺の台地に並んで横たわっている修治と富栄の遺体。

二人には上から蓆が掛けられている。

周りには人夫や雑誌編集者たちが傘も無く雨に打たれ、ずぶ濡れで立ち尽くしている。

どの人の顔も、悲愴感で溢れている。
そのうちの一人、野平健一（２４）が、土堤の上に立っている井伏の姿に気づく。
野平、土堤を登って行き、
野平「井伏さん」
井伏「やあ、野平君」
野平、井伏の視線の先にある修治と富栄の遺体を見て、
野平「今朝方近くの高校の先生が発見して、すぐ交番に連絡してくれました。そこから本部に連絡があって、石井君や野原君と一緒に引き揚げたんです」
井伏「それはご苦労様だったね」
野平「いえ……」
目を伏せる野平。
と、どこからか人々のざわめく声が聞こえ、二人は上流の方角を見る。
遠い橋の上に立つ見物人の傘が、うごめいている。
井伏「早く二人をここから運び出さなければならないね」
野平「ええ。葬儀社にはもう頼んであるんですが、棺を作るのに時間が掛かっているとかで、待てど暮らせど来ないんです。新聞社の連中も集まって来ているし、本当に困りました。ほら」
野平、向かい側の土堤の上を指差す。
数人の新聞記者たちが顔を伏せ、井伏と野平にカメラを向けている。

○千草・外
三鷹駅近くの二階建ての小料理屋。
建物の前に、霊柩車が停まっている。

○同・土間
男性の検視医（３０）が、寝棺の中に納められた修治の遺体を検視している。
検視医は懐中電灯を使い、修治の顔面や瞳孔を調べていく。

その様子を井伏、野平、修治の作家仲間や編集者たちが、土間から一段高くなった座敷のへりに一列に立って見ている。
井伏、棺の中の修治の顔を覗き込む。
その死顔は眠っているように穏やかで、口元には微笑が浮かんでいるようである。

○同・外
入口の前に立ち、物憂げに煙草を吸っている井伏。
野平が店の中から出て来て、煙草に火をつける。
野平「何だか今にも起き出しそうでしたね」
井伏「うん。実に穏やかだった」
野平「先日お会いした時も、あんな表情で僕を駅まで送ってくれました」
井伏「彼は幸運だね。君のような友人が最後まで傍にいてくれて」
野平「そんな、友人だなんて恐れ多い。僕はただの編集者です。井伏さんこそ、太宰さんの一番の友人ではないですか」
井伏「友人か……」
井伏、目を伏せ、
井伏「野平君。僕は本当に彼の友人だったのだろうか」
野平「え？　そうに決まっているじゃないですか」
井伏「では、彼はなぜ死ぬ間際に、僕を悪人と書いたのだろうか」
野平、答えに窮する。
井伏「太宰君の言う通り、僕は悪人だったのかもしれない」
野平、まっすぐな目で井伏を見て、
野平「これだけははっきり言えます。井伏さんがいなければ、『走れメロス』も『人間失格』も生まれませんでした。太宰さんが何と言おうと、僕は井伏さんに感謝しています」

井伏「ありがとう」
沈黙する二人。
降り続く雨。

○井伏家・書斎
入ってくる井伏。
机に向かうと、修治の遺書が載った新聞を手に取る。
『井伏さんは悪人です。』
井伏、しばらくその文字を見つめ、引き出しから一枚の古びた封筒を取り出す。
宛名は『井伏鱒二様』、差出人は『津島修治』と書かれている。
井伏、封筒を見ながら、過去に思いを馳せる。

○（回想）同・書斎（１８年前）
井伏（３２）が机に向かい、『ユマ吉ペソコ』と題したナンセンス読み物を書いている。
節代（１８）が入ってきて、
節代「津島さんからお手紙です」
節代、井伏に封筒を差し出す。
井伏「津島？」
井伏、封筒を見て、
井伏「ああ、例の熱心な読者か。そういえば、前の手紙の返事を出していなかったな。どれどれ」
井伏、封筒を開け、手紙を取り出して読む。
修治の声「私はどうしても文学で身を立てたいのです。どうかご慈悲を賜りたい。会ってくれなければ、自殺します」
井伏の目が、驚きで大きく開く。
井伏「え！？」
節代「どうしたんですか？」
井伏「僕が会わなければ、自殺するらしい」
節代「自殺？　まさか」
節代、笑う。

井伏「いや、笑いごとじゃないよ。こういうインテリゲンチャは、思い込みが激しいんだ。やると言ったら、本当にやる。参ったなあ」
節代「とりあえず、会ってあげればいいじゃないですか」
井伏「うん。そうだな。よし」
井伏、紙とペンを出すが、
節代「電報の方がよろしいんじゃないですか？」
井伏「そうだな。行ってくる」
井伏、慌てて帽子を被り、
井伏「参ったなあ」
と足早に出て行く。

○（回想）作品社・外観
神田の真新しい雑居ビル。

○（回想）同・応接室
原稿を読んでいる井伏。
その前に久留米の対の蚊絣と紬の袴を着た修治（２１）が座り、緊張の面持ちで井伏を観察している。
井伏、原稿を読み終わると、トントンと机で紙を揃える。
井伏「駄目だね」
修治「（落胆し）駄目、ですか？」
井伏「うん。だって、これは君、僕のユマ吉ペソコの真似じゃないか」
修治「いけませんか？」
井伏「いいかい？　津島君。僕がユマ吉ペソコを書いているのは、家族を食わせるためだ。もし君が本気で小説を書くつもりなら、あんなつまらないものを読んではいけない。古典を読みたまえ。流行を追っちゃいけない」
修治、井伏の言葉を素直に受け入れ、
修治「はい」
井伏「君の大学の専攻は？」
修治「フランス文学です」

井伏「では、ヴィヨンやプルーストなんかを
読むといい。僕の知り合いにフランス語の
原文を持っている男がいるから、頼んであ
げよう」
修治「いやあ、それが全くフランス語は話せ
ないのです」
修治、恥ずかしそうに微笑み、指の腹
で小鼻をさする。
井伏「では、君は一体大学で何を？」
修治「主に仲間と酒に狂っております」
井伏「困った奴だなあ。それならば、翻訳で
プーシキンを読むといい。あとは、漢詩も
いい」
修治、メモを取り出し、書き取る。
井伏、立ち上がり、
井伏「じゃあ、そういうことで。もういいか
な？」
修治「あの」
井伏「何だね？」
修治、姿勢を正し、
修治「僕を弟子にしていただけませんか？」
井伏「（困惑し）そんな、弟子だなんて。君、
僕のことをちょっと買いかぶりすぎだよ。
弟子に入るなら、もっと偉い先生のところ
に行ったらいい」
修治「いえ、僕は井伏さんがいいんです。お
願いします」
頭を下げる修治。
井伏「参ったなあ。僕は無理だよ。絶対駄目
だ」
修治、がっくりと首を垂れ、
修治「（独り言で）首吊り、飛び降り、ああ、
ガスもいいなあ……」
井伏「分かった、分かった！　とりあえず、
酒でも飲もう」
修治、顔を上げ、満面の笑みで、
修治「はい！」

○（回想）小料理屋・店内（夜）
カウンター席に座っている井伏と修治。

修治、お猪口に入った日本酒をぐいっと飲み干し、
修治「あー、これはいい酒だ！　女将、もう一本！」
厨房に立つ女将が、
女将「はい。ただいま」
井伏「君、もうちょっと味わって飲んだらどうだい」
修治「僕は酒がうまいから飲むわけではないんです。酔うために酒を飲むんです」
井伏「よく分からないな」
修治「その、何と言いますか、周りが酔っている中で僕一人だけが醒めている、そんな気がいつもするんです」
井伏「おかしなことを言うね、君は」
修治「おかしいから、死ぬことばかり考えてしまうんでしょう」
井伏「そんなに生きる事が苦しいかね」
修治「ええ……なんだか体のあちこちから鎖が絡まって、少しでも動くと血が噴き出すような、そんな感覚がするんです」
井伏「ご家族も心配だろう。君がそんなことばかり言っていたら」
修治「どうでしょうね。迷惑を掛け続けていますから、もう諦めているのかもしれません」
井伏「生まれはどこなんだい？」
修治「青森の金木というところです」
井伏「津軽か。いい所だね」
修治「ええ。でも、あちらに住んでいた頃は、息苦しかったですね。僕の実家はいわゆる大地主というやつで、金木の殿様なんて呼ばれていました」
井伏「ほう。では、君は若様というわけか」
修治「（苦笑し）まあ、そんなところです。城のような家で乳母に大事に育てられ、秀才、秀才とおだてられた成れの果てが、この僕です」
修治、おどけたポーズを取る。
井伏「なるほど……」

何やら考え込む井伏。
修治「どうしました？」
井伏「いや、君の幼少の頃の思い出、実に面白いと思ってね」
修治「そうですかね」
井伏「そうだよ。僕の子供時代なんて君と比べたら、極めて平凡なものだった。小説にしてみようと思ったことはないのかい？」
修治「いえ、とても恥ずかしくて。そんな、自分の思い出を小説にするなんて……」
井伏「いい小説を書きたいならば、恥なんて今すぐ捨てたまえ。自分の弱さをさらけ出すことで、人間らしさが生まれるんだ。僕が読みたいのは、誰かが書いた文章の真似ではなく、君の魂から出た言葉なんだ。津島修治の心の叫びなんだ」
修治、井伏の言葉が胸に響き、固まる。
井伏、照れ笑いを浮かべ、
井伏「ちょっと飲み過ぎたかな？」
修治、反応せず、井伏を見たまま固まっている。
井伏「津島君？」
と、突然わっと泣き出す修治。
他の客たちが、修治に注目する。
井伏「おい、どうしたんだ？　みんな見ているじゃないか」
修治「すみません。あまりにも素晴らしい言葉でしたので、つい……」
女将や客たちが、泣き続ける修治を訝しげに見ている。
井伏、愛想笑いを浮かべ、頭を下げる。

○（回想）道路（夜）
しっかりとした足取りで歩いている井伏とは対照的に、酔いが回って足元がおぼつかない修治。
井伏「津島君、もう一軒どうだい？」
修治「僕は……」
と言いかけ、修治は大きなくしゃみをする。

井伏「大丈夫か？　風邪でも引いたか？」
修治「いえ、もうこれ以上飲めない時に、なぜだかくしゃみが出るんです」
修治、再び大きなくしゃみをする。
井伏、困惑しつつ、
井伏「何だかよく分からないが、そういうことなら今夜はこれでお開きにしよう。今度は僕の家に来るがいい」
修治「はい！　失礼します！」
修治、井伏に深々と頭を下げ、去って行く。
踵を返す井伏。
だが、すぐに、
修治の声「わあ！」
井伏、振り返り、
井伏「どうした！？」
修治「蛇がいる！」
修治、その場にへたり込み、腰が抜けて動けない。
修治「井伏さん、助けて下さい！　僕は蛇だけは駄目なんです！」
井伏、修治の元に駆け寄り、
井伏「どこだ！？」
修治「そこです！　そこ！」
井伏、修治が指差した方向を見る。
と、井伏は何かを見つけ、笑い始める。
修治「（困惑し）何がおかしいんですか？」
井伏、地面から長い縄を拾い上げ、
井伏「これは蛇じゃない。ただの縄だよ」
笑いが止まらない井伏。
井伏「臆病だな、津島君は。腰まで抜かすなんて」
修治、必死に取り繕い、
修治「暗くてよく見えなかっただけです。そんなに笑うなんて、失敬だ」
井伏「すまん。許してくれ。しかし、僕に助けを求める君の顔ときたら……」
再び笑う井伏。
不満げな修治だが、井伏の笑い声を聞いているうちに、つられて笑い始める。

修治、また大きなくしゃみをして、
修治「あー、これはもう駄目だ」
次の瞬間その場に崩れ落ち、寝始める
修治。
井伏、修治の体を揺らし、
井伏「おい、津島君！？　大丈夫か？　津島
君！？」
起きない修治。

○（回想）井伏家・客間（朝）
布団で寝ている修治。
雀の鳴き声が聞こえ、目を覚ます。
見慣れない部屋に驚き、飛び起きる。
寝癖がひどい。
節代が入ってきて、
節代「おはようございます」
修治「あの、こちらはどこの旅館でしょうか
？」
節代「（笑い）あら、嫌だ。昨日の事全然覚
えておられないんですか？」
修治「いやあ、お恥ずかしいことに……」
修治、照れ笑いを浮かべながら、指で
鼻をさする。
節代、畳の上で正座し、頭を下げる。
節代「井伏の妻の節代です」
修治、慌てて布団の上で正座し、
修治「弟子の津島です」
と頭を下げる。
節代、手ぬぐいを修治の前に置く。
節代「洗面所は廊下の突き当りにあります。
ごゆっくりどうぞ」
節代、修治の寝癖を見て、クスクスと
笑いながら出て行く。
小綺麗な部屋を見回し、「ほー」と感
心する修治。

○（回想）同・書斎（朝）
机に向かい、原稿を書いている井伏。
修治、部屋に入ると正座をして、
修治「おはようございます。昨日は大変ご迷

惑をお掛けしました」
井伏「ああ、起きたか。昨日はあのまま死んだかと思ったよ」
修治「（苦笑し）お陰様で生き返りました」
井伏「次は君が僕を介抱する番だからな」
修治「はい。お任せください。では、失礼します」
修治が立ち上がろうとすると、
井伏「あ、津島君」
修治「はい」
井伏「君、将棋は指せるかね？」
修治「ええ。強くはありませんが」
井伏「よし。じゃあ、一局お手合わせ願おうか」
修治「せっかくですが、妻が待っておりますので……」
井伏「一勝負だけならいいだろう？　な？」
修治「はあ……」
井伏、将棋盤を修治の前に置き、パチパチと駒を置き始める。
×　×　×
井伏、盤上の駒を見つめ、
井伏「（頭を下げ）参りました」
修治も頭を下げ、
修治「失礼しました」
と立ち上がろうとするが、
井伏「どこへ行くんだい？」
修治「いや、あの、妻が……」
井伏「君、まだ一勝負終わったばかりじゃないか。これは三番勝負だよ」
修治「しかし……」
井伏「勝負は最後まで下りたら駄目だ。座りなさい」
修治、観念して、再び将棋盤に向かう。
嬉しそうに駒を並べ始める井伏と、それをげんなりした表情で見る修治。
（回想終わり）

○火葬場・外（夕方）
煙突の先から、薄黒い煙が空に昇って

いく。
傘を差し、その様子をじっと見ている井伏。
筑摩書房社長の古田晁（４１）が、火葬場の方からやって来る。
古田「中に入って下さい。風邪を引いてしまいますよ」
井伏「ありがとうございます。もう少ししたら戻ります」
古田、井伏の横に立ち、一緒に煙を見上げる。
古田「なかなか終わりませんね」
井伏「水死者の遺骸は、焼くのに倍の時間が掛かるそうです」
古田「でも、その分皆さんとお別れする時間も倍になる。寂しがり屋の太宰さんらしいですね」
井伏「そうですね」
古田「葬儀の件ですが、年長者の豊島先生が委員長を務めます。つきましては、井伏さんに副委員長をお願いしたいそうです」
井伏「僕がですか？」
古田「はい。あなたに送ってもらえれば、太宰さんも安心して旅立てるでしょう」
井伏「……申し訳ありませんが、お断りさせていただきます」
古田、驚きの表情で井伏を見て、
古田「なぜですか？　あなたは太宰さんの師匠なんですよ？」
井伏「確かにそうだったのかもしれません。しかし、最近はほとんど顔を合わせていませんでしたし、それに……」
口をつぐむ井伏。
古田「あの遺書なら読みました。私もどうして太宰さんがあんなことを書いたのか、見当もつきません。井伏さんが戸惑うのも無理ありません。しかし、あなたが太宰治を作り出したのは、紛れもない事実です。その太宰さんの最期を見届けるのも、井伏さんの義務ではないでしょうか？」

井伏、再び煙突から出る煙を見て、
井伏「……」
○（回想）井伏家・書斎（１３年前）
灰皿に置かれた煙草から立ち昇る煙。
真剣な表情で原稿を読んでいる井伏（３７）。
その後ろには修治（２６）が緊張の面持ちで正座し、井伏を凝視している。
井伏、原稿を読み終わると、机の上に置く。
表紙には『思ひ出　太宰治』と書かれている。
修治「それで……いかがでしたか？」
井伏「うん。大変良いね。この前のものと比べて、格段の相異だ」
修治「（ほっとし）ありがとうございます」
井伏「一本気に書かれているし、表現や手法にも骨法が備わっている。しかも、客観的なる批判の目を持って書かれている。このまま書き続けるといいだろう」
修治「はい」
井伏「ところで、この太宰というのは……」
修治、恥ずかしそうに鼻を指でさすり、
修治「いやあ、実は僕の新しいペンネームであります」
井伏「ほう。（読んで）ダザイ……」
修治「オサムです」
井伏「どうして津島じゃ駄目なのかね？」
修治「せっかくなら目立つ名前にしようと思いまして。それに僕の訛りですと津島はチシマに聞こえてしまいますが、太宰は津軽弁でもダザイです。いかがでしょうか？」
井伏「太宰治か……いいね。気に入った。後世に残る名前だ」
修治「（感動し）ありがとうございます」
井伏「今日から僕も君のことを、太宰君と呼ばなければいけないね」
修治「その名に恥じぬよう、寝る間も惜しんで、この作品を完成させたい所存です」

井伏「それはいけないよ。君は学生なんだから、学校に行かないと。書くことに疲れないためにも毎日登校して、登校することに疲れないためにも書き続ける。そうすれば、きっといい小説が書けるだろう」
修治、納得いかない表情で、
修治「はあ」
井伏「それで君、学校は卒業できそうなのかい？」
修治「（言いにくそうに）それが……どうにも難しそうなのです」
井伏「あと何単位必要なんだい？」
修治「全部です」
井伏「全部とはどういう意味だ」
修治「まだ一単位も取っていないということです」
井伏、腕組みをして、深い溜息を吐き、
井伏「ご家族はこのことを知っているのかね？」
修治「いえ、全く」
井伏「それで、どうするつもりなんだい？」
修治「兄とは卒業できなければ、仕送りの契約を打ち切る約束をしております。ですので、大学は中退して、就職をしようと思います」
井伏「当てはあるのかね？」
修治、訴えかけるような顔で井伏を見る。
身構える井伏。

○（回想）都新聞社・会議室
紺色の背広を着た修治が、二人の面接官の前に座っている。
面接官１「井伏君の頼みとあれば、断るわけにはいかなくてね。彼には大学の時分に随分世話になったから。あれほどの好人物はなかなかいない」
修治「はい。大変尊敬しております」
面接官１「彼の話だと、君も小説を書いているとか」

修治「はい。井伏さんにご指導頂いております」
面接官１「それなら安心だ」
面接官２、修治の履歴書を見て、
面接官２「東京帝大か。僕の後輩だな」
修治「先輩にお会いでき、光栄です」
面接官２「仏文科ということは、辰野先生だよね？　先生はお元気かな？」
修治「はい。恐らく……」
「ん？」と言う表情で、修治を見る面接官たち。
面接官２「実はね、ちょうど外国語のできる人を探していたところなんだ。入社したら外国に取材に行ってもらうことになるけど、構わないかな？」
修治「はい。喜んで行かせて頂きます」
面接官２「よろしい。（面接官１に）では、よろしくお願いします」
面接官１「はい。（修治にフランス語で）当社を希望した理由を教えてください」
修治、固まる。
面接官２「津島君？」
修治「あ、はい。すみません。もう一度お願いします」
面接官１「（フランス語で）当社を希望した理由を教えてください」
再び固まる修治。

○（回想）万世橋（夕方）
魂が抜けたような顔で、ふらふらと歩いている修治。
橋の真ん中で立ち止まると、下に流れる川を眺める。
修治、ネクタイを外し、
修治「（じっと見て）……」

○新聞記事
『新進作家死の失踪？　芥川宗の太宰治君、突然行方くらます。』

○（回想）井伏家・居間
井伏、節代（２３）の前に座っている
小山初代（２３）。
初代「（涙ながらに）いつも俺はもうすぐ死ぬんだなんて冗談で言っておりましたけど、まさか修ちゃが本当に死ぬなんて……」
節代「奥さん、まだ決まったわけじゃありません。しっかりして下さい」
井伏「（初代に）どこか彼の行きそうな場所に、心当たりはありませんか？」
初代「熱海にも三島にもいないですし、他には……」
井伏「太宰君は臆病ですから、自分の行き慣れた場所以外には決して行きません」
初代「そうですね……修ちゃが他に行くとしたら、三浦半島ぐらいですかね。海を見に一人でよく行っていましたから」

○（回想）三浦半島の漁村
海辺で貝を採っている女性（７０）に、修治の写真を見せる井伏。
井伏「この青年に見覚えはありませんか？」
女性、写真を見て、
女性「さあ……分かりません」
井伏「ありがとうございました」
× × ×
巡査（３５）と立ち話をしている井伏。
井伏「この二、三日、界隈に自殺者はありませんか？」
巡査「いや、無いですなあ」
井伏「（安堵して）そうですか」
巡査「どなたかお探しですか？」
井伏、一瞬考え、
井伏「兄弟です」
巡査「それは大変だ。一緒に探しましょう」

○（回想）鎌倉の山中
雑木林の中に佇んでいる修治。
修治、ネクタイを木の枝に結び、輪を作る。

そして石の上に立つと、頭を輪の中に入れる。
修治の頬を伝う涙。
心を決め、土台の石を蹴飛ばす。
修治の首が締まり、じたばたと足が動く。
次の瞬間、バキッという音と共に、修治は腰から地面に落ちる。
修治「いってー」

○（回想）海岸沿いの道路（夕方）
腰に手を当て、苦痛に顔を歪めて歩いている修治。
その首には、ネクタイでできた赤い蚯蚓腫れがある。
修治、バス停で立ち止まり、ベンチに腰掛ける。
手持無沙汰で、傍らに置かれている新聞を何気なく手に取って読む。
しばらく目を通していると、井伏による『芸術と人生』と題する文章を見つける。
修治、『どうか頼む！　太宰君、帰って来てくれ。』という文に見入る。

○（回想）三浦半島の漁村（夕方）
巡査と海岸沿いを歩いている井伏。
巡査「修治君！」
井伏「修治！」
必死の形相で周囲を見回す井伏だが、人の姿は見当たらない。
井伏の声「どうか頼む！　太宰君、帰って来てくれ。今日も僕はこうして君を捜しに三浦半島に来ている。早く帰って来て、いい小説をたくさん書いてくれ。将棋もたくさん指そう。勝ちっ放しはないよ、太宰君」

○（回想）井伏家・客間（夜）
新聞に載っている『芸術と人生』を読んでいる初代。

その前に座っている井伏と節代。
井伏「こんなことしかできず、申し訳ありません」
初代「（涙ながらに）いえ、ここまでしていただいて見つからなければ、私も諦めがつきます。本当に修ちゃは幸せ者です」
節代、初代の手を取り、
節代「気をしっかり持って下さいね」
頷く初代。
と、ボーンと壁時計が鳴り、井伏は時間を見る。
井伏「いつもならちょうど今時刻、縁側からこんばんはと酒を求めてやってくるんだが……」
わっと泣き出す初代。
節代、初代の背中に手を当て、慰める。
修治の声「こんばんは」
縁側を見る一同。
修治が立っている。
初代「修ちゃ！」
初代、修治に駆け寄り、抱き締める。
初代「どこ行ってたのよ！」
修治「鎌倉」
初代「どれだけみんな心配したと思ってるの！？　あんたは大馬鹿よ！」
初代、声を上げて泣く。
修治「すまん」
井伏、修治に歩み寄り、
井伏「お帰り」
修治「ただいま帰りました」
バツが悪そうに笑みを浮かべる修治。
（回想終わり）

○同・書斎（夜）
喪服姿の井伏が、本棚から一冊の本を取り出す。
本を開くと、『太宰治著　第一小説集晩年』と書かれた本扉が現れる。
節代、入って来て、
節代「佐藤先生がお見えになりました」

井伏、本を机に置き、背筋を正す。
喪服を着た佐藤春夫（５６）が、節代と入れ替わりに入って来る。
佐藤「やあ。しばらく」
井伏「こんばんは」
佐藤「太宰の所に行く前に、君の顔を見ておこうと思ってね。古田君が、君の様子を心配していたから」
井伏「ご迷惑をおかけしました」
佐藤「それで、葬儀委員の件だが、本当にやらないつもりなのか？」
井伏「……まだ決めかねております」
佐藤「彼の死を受け入れられない気持ちはよく分かる。僕もそうだ。だが、君は太宰のたった一人の師匠だ。こんな終わり方をして、君は後悔しないのか？」
井伏「……」
佐藤「確かに太宰は滅茶苦茶な奴だったが、僕にとっても大事な友人だった。君ならなおさらだろう。これで太宰とはお別れなんだ。僕の顔に免じて頼む」
井伏、しばらく考え、
井伏「分かりました。やらせて頂きます」
佐藤「（安堵し）ありがとう」
佐藤、机の上の本を手に取り、
佐藤「『晩年』か。懐かしいな」
井伏「もう十二年も昔になります」
佐藤「思えばこの頃の太宰は、いつ死んでもおかしくなかったな」
井伏「ええ。私の寿命も縮まりました」
佐藤「私もだ」
二人、笑う。
佐藤、『晩年』を開く。

○『晩年』の一ページ目
『死のうと思っていた。』

○（回想）上野精養軒・入口（十二年前）
入口の横に、『太宰治　第一小説集　晩年　上梓紀念会』という看板が掲げ

られている。

○（回想）同・宴会場

井伏（３８）や佐藤（４４）を含む招待客たちが、着席している。

井伏、隣のテーブルに座っている修治（２７）を見る。

黄色い麻の着物で着飾っているが、その顔は蒼白で、頬がこけている。

心ここにあらずという様子。

壇上に立つ司会者が、

司会者「では、ここで主賓の太宰治先生から、皆様にご挨拶がございます。太宰先生、お願い致します」

出席者たちから拍手が起こる。

虚空を見つめたまま動かない修治。

司会者「太宰先生？」

修治、我に返り、司会者を見る。

司会者「ご挨拶をお願い致します」

修治「ああ、はい」

修治、立ち上がると、『晩年』の本を手に壇上に立つ。

修治「本日はお忙しい中、私の第一小説集の出版記念会にお越し頂きまして、誠にありがとうございます。自分で言うのもおこがましいですが、読んで面白い小説も二、三ありますから、お暇の折に読んでみて下さい。でも、私の小説を読んだところで、皆様の生活はちっとも楽になりません。ちっとも偉くなりません。なんにもなりません。だから、私はあまりお勧めできません」

笑う出席者たち。

修治「とにもかくにも、この本を出して貰えれば、もう死んでも思い残すことはありませんので、題も『晩年』としました」

出席者たちから笑顔が消える。

修治「私はこの本一冊の為に、十箇年を棒に振りました。身の置きどころを失い、絶えず自尊心を傷つけられて、彷徨い続けました。有り金全てを酒に浪費し、我が身をわ

ざと損じました。百篇にあまる小説も破り捨てました。芥川賞にも敗れました。そうして残ったのは、たったこれだけです」

修治、本を掲げ、

修治「全部で原稿用紙六百枚。稿料六十円。これでは到底借金は返せません」

修治、着ている羽織の袖口を押さえると、それを出席者たちに見せて、

修治「この羽織、この着物に至るまで、頭の先まで全部借り物なのであります。下駄でさえも、借りたのであります。私はこの本一冊を創る為のみ生まれました。今日より後の私は、全くの死骸です。私は余生を行きます。ありがとうございました」

出席者たちは戸惑い、お互いを横目で見る。

居たたまれなくなり、拍手をする井伏。

他の出席者たちも、渋々拍手を送る。

○（回想）上野公園

並んで歩いている井伏と佐藤。

佐藤「何だかおかしな会だったな」

井伏「ええ」

佐藤「太宰はいつもあんな調子なのか？」

井伏「実は僕も会うのは久しぶりなんですよ。彼が船橋に越してからは、専ら手紙でのやり取りでしたので。まさかあんな姿になっているとは……」

佐藤、立ち止まり、

佐藤「ちょっと君に見てもらいたい物があるんだ」

○（回想）佐藤家・居間

佐藤、畳の上に毛筆で書かれた書簡を広げる。

その長さ約四メートル。

井伏「古文書か何かですか？」

佐藤「いや、太宰からの手紙だ」

井伏「え？」

井伏、目を丸くして手紙を眺める。

井伏「（書簡を読んで）『第二回の芥川賞は、私に下さいますよう、伏して懇願申し上げます。今度も私の前を素通りするようでございましたなら、私は再び五里霧中に彷徨わなければなりません。私を助けて下さい。佐藤さん、私を見殺しにしないで下さい。命をお任せ申し上げます。』」

佐藤「選考委員は他にいるから、僕一人の力ではどうにもならんと伝えたが、懇願の手紙を何通も送り付けてきて、参ったよ」

井伏「それは申し訳ございませんでした」

佐藤「前からおかしな奴だとは思っていたが、最近の彼はちょっと心配だな。君、折を見て、一度彼を訪ねてくれないか。僕のせいにされて死なれたら困るからな」

井伏「はい」

井伏、修治の書簡を見て、溜息を吐く。

○（回想）船橋の修治の家・玄関外

新築の借家の前に立つ井伏。

門柱には、『津島修治』の脇に小さく『太宰治』と書き加えた表札が掛けられている。

井伏、緊張気味に戸を叩く。

中から初代（２４）が出てくる。

以前よりやつれた印象である。

初代「（驚き）先生」

井伏「しばらくぶりだね。元気にしていたかい？」

初代、答える代わりに、突然井伏にしがみついて泣き出す。

井伏「おい、急にどうしたんだね？」

井伏、どうしていいか分からず、オロオロと辺りを見渡す。

○（回想）同・居間

初代、井伏に箱一杯に入った空の注射器を差し出す。

初代「全部鎮痛剤です」

井伏「いつから中毒に？」

初代「去年修ちゃが盲腸で入院した時からです。あんまり痛い、痛いと騒ぐものですから、お医者さんも困って、日に何本も打つようになって……芥川賞の選考に落ちてからは、一日に三十本も四十本も打つようになりました。お兄さんからの仕送りも、全部注射代に消えてしまいました。終いには私の着物まで持ち出して、みんな薬に換えてしまいました」

井伏「そんな大変なこと、どうして言ってくれなかったんだ」

初代「何度もご相談しようとしました。でも、あの人は、もう三、四日、待て。俺の体の始末は俺がすると言って、聞かなくて……。先生、私もうどうしたらいいか……」

顔を押さえ、声を上げて泣く初代。

井伏、憐れむような目で初代を見る。

初代、畳に手をつき、

初代「お願いします。修ちゃを助けて下さい。お願いします」

井伏、覚悟を決め、

井伏「分かった。僕が何とかしよう」

その時、玄関から戸が開く音がし、

修治の声「ただいま」

修治、入って来て、

修治「（嬉しそうに）やあ、井伏さん。よくお越し下さいました。今日はどうされました？」

厳しい視線を修治に送ったまま、答えない井伏。

修治、泣いている初代を見て、状況を理解する。

井伏「（初代に）奥さん、太宰君と二人にしてもらえますか？」

× × ×

重苦しい空気の中、向かい合って座っている井伏と修治。

井伏「初代さんの為にも、今すぐ入院したまえ」

修治「僕もそうしたいのは山々ですが、今す

ぐは無理です」
井伏「どうしてだね？」
修治「文芸春秋の小説三十枚を急いで書かなければなりません。締め切りを五日過ぎている上に、稿料も前借しています」
井伏「では、稿料は返すことだな」
修治「それはできません」
井伏「なぜだ」
修治「それは……」
修治、ちらりと箱の中の注射器を見る。
井伏、大きく息を吐き、
井伏「入院するのが嫌なら、診察だけでも受けてくれないか？　佐藤さんも大変心配しておられる」
修治「ご心配はありがたいですが、僕は小説を書かなければならないんです」
井伏「死んでしまっては、元も子もないんだぞ。文学を止めるか止めないか、今がその瀬戸際だ。原稿のことは、僕が文芸春秋を訪ねて何とかしよう。だから太宰君、どうか入院してくれ。これが一生一度の僕の願いだ。頼む」
井伏、頭を下げる。
その姿をじっと見つめる修治。
と、修治は立ち上がり、無言で隣の部屋へと行く。
しばらくして井伏は身を乗り出し、襖の向こう側を覗き込む。
修治が部屋の隅に座り、声を殺して泣いている姿が見える。

○（回想）走るハイヤー・車内
後部座席に修治を挟んで座っている井伏と初代。
修治、立ち上がろうとして。
修治「やっぱりやめます」
井伏と初代、慌てて太宰の体を押さえ、
井伏「小説が書けなくなってもいいのか？」
太宰「（静止し）……」
大人しく座る修治。

○（回想）精神病院・閉鎖病棟・修治の病室
薄暗い六畳ほどの個室。
鉄格子のはまったガラス窓から漏れる僅かな光が、修治の顔を照らしている。
修治、脂汗を流しながら、『救助タノム』、『不法監禁』、『虐待』などの文字を壁紙に色鉛筆で書き殴っている。

○（回想）同・廊下
修治が動物園の猿のように入口の鉄格子に掴まり、向こう側に立つ初代に向かって叫んでいる。
修治「俺は狂ってなんかいない！　ここから出してくれ！」
狂人のように叫び声をあげる修治。
初代、泣きながら、逃げるように去って行く。

○（回想）井伏家・客間
津島文治（３８）が、前に座る井伏に深々と頭を下げる。
文治「この度は、弟が大変ご迷惑をお掛けしました。井伏様には、お詫びのしようもございません」
井伏「いえ、無事で何よりです」
文治「舎弟の無軌道ぶりには、かねがね手を焼いておりました。修治が退院しましたら、津軽の牧場で羊のお守りでもさせます」
井伏「お守りですか……」
井伏、間を置き、
井伏「私はそのお考えには反対です」
文治「え？」
井伏「修治君には、東京で小説を書いてもらいたいです。この数年彼の小説を読んできましたが、ようやく物になってきました。ここで辞めさせるのは、あまりにも惜しい。彼には才能があります」
文治「ありがたいお言葉ですが、修治に健康な生活を送らせるためには、津軽に引き籠

らせるしかありません」
井伏「兄上様のお気持ちはよく分かります。
しかし、今彼から小説を取り上げるということは、唯一の生きる楽しみを奪うことと同じです。ここはどうかこの井伏鱒二に、修治君のことをお任せ頂けないでしょうか？」
まっすぐな目で文治を見る井伏。
文治「……分かりました。そこまで仰るならば、お任せします。ですが、私からの仕送りは、あなたが修治に渡してください。直接送ると、全部酒代に使ってしまいますので」
井伏「承知しました。お約束します」

○（回想）修治の天沼の新居・室内
一軒家の二階の小綺麗な八畳間。
井伏の前で正座している修治。
井伏「具合はどうだい？」
修治「はい。お陰様で、すっかり良くなりました。これで小説に打ち込めそうです」
井伏「それは良かった。実はね、君が入院している間、新潮社と改造社から原稿の依頼があった。やってみるかね？」
井伏、修治に二通の封筒を差し出す。
修治、感激の面持ちで封筒を見つめ、
修治「喜んでお受け致します。井伏さんの御恩に報いることができるよう生活を改め、必ず良い作品を書きます」
頭を深々と下げる修治。
井伏、満足そうに笑みを浮かべる。
井伏「初代さんは元気かね？」
修治「ええ。でも、僕が退院してから、なんだかぼんやりしていることが増えましてね。何でもなければいいんですが」
井伏「君があれだけ苦労を掛けたんだ。疲れるのも無理もないだろう。しっかり労わってやりなさい」
修治「はい」

○（回想）井伏家・寝室（深夜）
眠っている井伏と節代。
と、誰かが勢いよく玄関の戸を叩く音が聞こえ、二人は目を覚ます。
井伏、眼鏡を掛けると時計を見て、
井伏「一体こんな時間に誰だ」
修治の声「（酔った声で）井伏さん！　こんばんは！　弟子の太宰でございますよ！」
お互いの顔を見て、深い溜息を吐く井伏と節代。

○（回想）同・玄関内（深夜）
外から戸を叩いている修治。
修治の声「井伏さん！　郵便です！　井伏さん！」
井伏がやって来て、戸を開ける。
そこには泥酔した修治が立っている。
井伏「静かにしないか！　一体何事だ！？」
修治、井伏の顔を見た途端、突然すがりついて泣き出す。
井伏「おい、どうしたんだ？　太宰君？」

○（回想）同・客間（深夜）
井伏の前に座っている修治。
井伏「相手の男は誰だね？」
修治「（涙ながらに）四郎君という、僕の親戚の画家です。僕が入院している間に、妻と間違いを犯したそうです」
井伏「二人の関係は長いのかね？」
修治「いえ、一度だけだそうです」
井伏「そうか……それなら許してやったらどうだね。初代さんも、きっと君がいなくて寂しかったんだろう」
修治「許すぐらいなら、一緒に死にます」
井伏「馬鹿！　そんなことを言うんじゃない！　せっかく中毒も治ったというのに。参ったなあ」
修治「僕はもう破滅です。別れます」
井伏「少し落ち着くんだ。よく考えてみたまえ。あんなに君のことを愛してくれる女性

がどこにいる」
修治、静かになり、物思いにふける。
修治「……やっぱり別れます」
井伏「君、僕の言ったことが聞こえなかったのか？」
修治「僕も初代を愛しています。だから、別れるんです。妻をこのような行為にまで追いやるほど、日常の生活を荒廃させてしまったのは僕の責任です。初代が幸せになるためにも、僕は別れます」
井伏「彼女の気持ちはどうなるんだ？　君とは別れたくないんだろう？」
修治「生きていくためには、愛さえ犠牲にしなければなりません。そのことに今気づきました」
井伏「本当にそれでいいのか？」
修治「はい。僕は生きます」
決意に満ちた目で、井伏を見る修治。

○（回想）鎌滝富方・修治の部屋
一軒家の二階にある四畳半の貸し部屋。
床に寝転がり、無気力で畳の紋縁をぼんやりと見ている修治。
傍らにはコップに入った飲みかけの焼酎と、一升瓶が置かれている。
と、戸がノックされ、
井伏の声「太宰君。井伏だ」
修治、慌てて起き、身を整える。
修治「どうぞ」
戸が開き、井伏が入ってくる。
井伏「やあ、生きとるかね」
修治「ええ。まあ、何とか」
井伏、修治の前に座り、
井伏「それで、どうだね？　小説の方は」
修治「いやあ、どうにもこうにも。薬と一緒に、創作意欲も抜けてしまったようです」
修治、鼻を指でこすり、苦笑いをする。
井伏「笑いごとじゃないよ。僕は君の世話をするとお兄さんに約束した手前、君にはちゃんとしてもらわなきゃ困るんだよ」

修治「はあ。すみません」
井伏「竹村書房にも頼み込んで、出版をしてもらう約束を取り付けたんだ。頼んだよ」
修治「はい」
井伏、封筒を差し出し、
井伏「僕はしばらく旅で留守にするから、来月分は妻から受け取ってくれ」
修治「どちらに行かれるんですか？」
井伏「河口湖の傍に、僕の知り合いの宿があってね、天下茶屋というんだ。飯もうまくて、景色も素晴らしい所だ」
修治の表情が暗くなる。
修治「じゃあ、僕はまた一人ですね」
井伏「心配するな。三週間で帰ってくる」
修治、訴えかけるような顔で井伏を見る。
井伏「（仕方なく）……一緒に来るかい？」
修治、満面の笑みで、
修治「はい。喜んで」

○（回想）天下茶屋・外観（朝）
御坂トンネルのすぐ側。
国道に面して建っている木造２階建ての掛茶屋兼旅人宿である。

○（回想）同・修治の部屋（朝）
窓の外にそびえ立つ富士山を眺めている修治。
つまらなそうにあくびをする。

○（回想）同・食堂（朝）
登山服姿の井伏が、朝食を食べている。
修治、二階から下りてきて、
修治「今日はお早いですね」
井伏「うん。仕事も一段落ついたし、三ツ峠にでも登ろうと思ってね。君の方はどうだ？　何か書けたかい？」
修治「いやあ、あの富士を見ていると、何だか風呂屋の壁を見ているようで、力が抜けてしまいます」

と、従業員の中村たかの（１８）が、
たかの「まあ、富士山のことをそんな風に言うなんて、失礼しちゃうわ」
修治「（苦笑いし）これは失敬」
たかの「先生も一度峠の上から富士を見たらいいわ。ここで見るのとは、全然違うんだから」
修治「そうかね。そう言われたら、見るしかないな。井伏さん、僕もお供していいですか？」
井伏「構わないが、その恰好でかい？」
太宰、着流し姿の自分の姿を鏡で見る。

○（回想）三ツ峠・山道
山道を登っている井伏と修治。
修治は茶屋のドテラとゴム底の地下足袋を履いており、頭には小さい麦わら帽子が乗っている。
すれ違う登山客が、不格好な修治を見てクスクス笑う。
修治、恥ずかしそうに俯く。
井伏「身なりなんか気にしなくていい」
修治「（嬉しそうに）はい」

×　×　×

峠の頂上。
茶店の前の長椅子に座っている井伏と修治。
濃い霧が立ち込め、周りは何も見えない。
井伏が退屈そうに煙草を吸うと、修治は大きなあくびをする。
茶店の女店主（７５）が、二人にお茶を持ってくる。
修治「富士山はどの方角でしょうか？」
女店主「ええと……少々お待ち下さい」
女店主、店に戻る。
井伏、番茶をすすりながら、
井伏「実はね、君にお見合いの話を見つけてきたんだ」
修治「え？　僕にですか？　井伏さん、正気

ですか？」
井伏、笑って、
井伏「君を一人にしておくのも心配だし、何よりいい小説を書くには、ちゃんとした生活が必要だからね。どうかな？」
修治「大変有難いお話です。ぜひよろしくお願いします」
井伏「よろしい。では、乾杯だ」
お茶で乾杯をする二人。
そこに女店主が、大きな額に入った富士山の写真を手に戻ってくる。
女店主「お待たせしました」
女店主、井伏と修治の前方にある岩の端に立ち、写真を両手に高く掲げる。
女店主「ちょうどこの辺に、この通りに大きくはっきり富士山が見えます」
写真の中の見事な富士山の姿に、「おお」と感嘆の声を上げる井伏と修治。

○（回想）甲府の街の俯瞰
山々に囲まれた晩夏の甲府盆地。

○（回想）石原家・客間
縁先に垂れ下がっている青葡萄の房。
緊張の面持ちで座っている井伏と修治。
井伏は登山服姿で、隣に座る和服の修治は、ハンカチで顔の汗を拭いてばかりいる。
二人の前に座っているのは、お見合い相手の石原美知子（２６）と、母の石原くら（６４）。
美知子はデシンのワンピースを着ている。
井伏「女学校には何年お勤めですか？」
美知子「父が亡くなった年からなので、ちょうど５年になります」
井伏「それはお気の毒に」
くら「美知子には、随分と苦労を掛けました。ですので、この子には幸せになってもらいたいんです」

井伏「ごもっともです」
修治、部屋の中をきょろきょろと見回し、落ち着かない。
くら「あの、津島さん」
修治「（ハッとし）あ、はい」
くら「小説家でいらっしゃるとか」
修治「ええ。まあ、そんなところです」
美知子「どんな作品をお書きになるんですか？」
修治「私小説が主です。その、何と言いますか、自分の恥をさらけ出すというか……」
美知子「はあ」
理解できていない様子の美知子とくら。
気まずい沈黙。
井伏、必死に話題を変えようと部屋の中を見回す。
そして、修治の後ろを見上げ、
井伏「おや、富士」
修治、体を捻じ曲げて、背後の長押を見上げる。
そこに掛けられているのは、富士山頂大噴火口の鳥瞰写真。
井伏「まるで睡蓮の花のようですな」
くら「主人のお気に入りの写真ですの」
井伏「そうでしたか。いや、これはお見事」
修治、写真を見上げている美知子を見る。
縁側からの日の光で照らされるその顔。
目が離せなくなる修治。

○（回想）天下茶屋・修治の部屋
机に向かい、『富士に就いて』と題された小説を書いている修治。
と、開けっ放しになった戸から、バッグを持った井伏が入ってくる。
井伏「太宰君」
振り返る修治。
井伏「すまんが、急な仕事で東京に帰ることになった。お先に失礼するよ」
修治「そうですか。それは寂しいですな」

井伏「すぐ慣れるさ。それでどうかね？　小説の方は」
修治「何とか形になりそうです」
井伏「それはよかった。精々頑張りたまえ。じゃあ、僕はこれで」
井伏、出て行く。
修治「井伏さん」
すぐに戻ってくる井伏。
修治「決めました。美知子さんと結婚したいです」
井伏、笑顔で頷くと、再び出て行く。

○（回想）石原家・客間
美知子とくらの前でかしこまっている修治。
修治「私は恥の多い生活を送ってきました。そのせいで実家に多大なる迷惑を掛け、今回の結婚につきましも、故郷からの助力は全く期待できません。この上は、縁談を断られても仕方が無いと覚悟を決め、今日こうしてお伺いした次第です」
美知子は冷静な様子で、
美知子「それで、お家では反対なのでございましょうか？」
修治「いいえ、そういうわけではなく、お前一人でやれという具合だと思われます」
くら、ふふふと笑い、
くら「私達も御覧の通りお金持ちではございませんし、仰々しい式などは望んでおりません。ただあなたお一人、愛情と職業に対する熱意さえお持ちならば、それで私たちは結構でございます」
修治、くらの言葉に胸を打たれ、
修治「必ずいい作家になって、美知子さんを幸せにします。たとえ流行作家にはなれなくとも、立派な仕事をいたします。お約束申します」
深々とお辞儀する修治。

○（回想）バス停

バスを待っている修治と美知子。
美知子「今日はわざわざ遠い所までありがとうございました」
修治「いや、何のこれしき。それで……どうです？　もう少し交際してみますか？」
美知子「（微笑み）いいえ。もう十分」
修治「そうですか」
会話が途切れ、修治は必死に会話を絞り出すが、
修治「あの」
美知子「はい」
修治「何か質問ありませんか？」
美知子、しばらく考え、
美知子「ございます」
身構える修治。
美知子「富士山には、もう雪が降ったでしょうか？」
修治、拍子抜けした様子で、
修治「まだですが、もうすぐでしょう。頂きの方に――」
修治、ふと前方を見て、富士山に気づく。
修治「なあんだ。甲府からでも、富士が見えるじゃないか。馬鹿にしていやがる。今のは愚問です」
美知子、俯きながらくすくすと笑い、
美知子「だって、御坂峠にいらっしゃるのですし、富士のことでもお聞きしなければ悪いと思って」
富士山を見ながら笑う二人。

○（回想）バス・車内
停車中のバスに、地元民と観光客が乗り込んでくる。
後部座席には、修治が茶色の被布を着た女性客（７０）と並んで座っている。
女性の車掌（３０）が独り言のように、
車掌「今日はよく富士が見えますね」
観光客たちが感嘆の声を上げ、富士山を見る。

修治はやれやれという表情で、ちらりと隣の女性客を見る。
女性客は富士山に一瞥もくれず、反対側の崖の斜面を見ている。
女性客「おや、月見草」
修治、女性客の視線の先にある一輪の黄金色の月見草を見る。
健気にすくっと立つ花の姿に、修治の目が輝く。

○（回想）天下茶屋・修治の部屋
『井伏様、御一家様へ。このたび石原氏と約婚するに当り、一礼申し上げます。』と手紙を書いている修治。
修治の声「初代との破婚は、私としても平気で行ったことではございません。私は、あの時の苦しみ以来、結婚というものの本義を知りました」

○（回想）井伏家・書斎
修治の手紙を読んでいる井伏。
修治の声「結婚は、家族は、努力であると思います。貧しくとも、一生大事に努めます。再び私が破婚を繰り返した時には、私を完全の狂人として、棄てて下さい」

○（回想）天下茶屋・外
建物の近くの原っぱに、植物の種を蒔いている修治。
たかの、箒片手にやって来て、
たかの「鳥の餌でも撒いているんですか？」
修治「違うよ。馬鹿だなあ。月見草の種だよ。山で集めてきたんだ。ほら」
修治、たかのに種を見せる。
たかの「どうして月見草なんですか？」
修治「それは、富士には月見草がよく似合うからさ」
たかの「ふうん」
修治「君もそのうち分かるよ」
たかの、富士山を見て、

たかの「あ、雪」
修治も富士山を見る。
山頂が雪で真っ白に輝いている。
修治「いいね」
たかの「（得意げに）素晴らしいでしょう？
御坂の富士は、これでも駄目？」
修治「いや、やはり富士は、雪が降らなければ駄目なものだ」
笑顔で富士山を眺める修治。

○（回想）井伏家・居間
緊張の面持ちで並んで座っている、着物姿の修治と美知子。
二人の前に立つカメラマンが、シャッターを切る。
その様子を部屋の入口から満足げに見ている井伏。

○（回想）津島家・外観
三鷹の新築の借家。
玄関の左の柱には、修治が菓子折りの箱の裏に墨で書いた『津島修治（太宰治）』という表札が打ち付けられている。

○（回想）同・居間
修治が机に向かい、腕を組みながら美知子に『駆け込み訴え』を口述筆記させている。
修治「（流れるように）あの人は、私の此の無報酬の、純粋の愛情を、どうして受け取って下さらぬのか。ああ、あの人を殺して下さい。旦那さま。私はあの人の居所を知って居ります。御案内申し上げます。あの人は私を賤しめ、憎悪して居ります。私は、きらわれて居ります」
と、井伏が庭先に現れ、
井伏「やあ、やっとるかね」
修治「ようこそいらっしゃいました。（美知子に）お茶を」

美知子「はい」
美知子、立ち上がるが、
井伏「いや、結構。これを渡しに来ただけだから」
井伏、縁側に座り、仕送りの封筒を修治の前に置く。
修治、丁寧に封筒を受け取り、
修治「（頭を下げ）ありがとうございます」
美知子も頭を下げる。
井伏「君もこの調子で小説が売れれば、じきに仕送りも必要なくなるだろう」
修治「はい。必ず流行作家になります」
美知子「ならなくていいですよ、そんなもの。普通に暮らしていければ十分です」
修治「（井伏に）自分のことを小説に書かれるのが嫌なんですよ」
美知子「だって恥ずかしいじゃありませんか。見ず知らずの人に私のことが知られるなんて、想像するだけで顔から火が出ます」
井伏「奥さん、この男には気を付けた方がいいですよ。ある事無い事何でも小説に書いてしまいますから。僕なんて、してもいない屁の話まで書かれてしまいました」
修治「でも、僕はあの山の頂上で、井伏さんが屁をされるのを聞きました。僕が嘘なんか書く筈ないじゃありませんか。確かに放屁なさいました」
笑う修治と、必死に笑いを堪える美知子。
井伏「君、どうかしてるぞ。僕は友人の前で屁などしない」
修治「いいえ、確かになさいましたね。いや、一つだけでなくて、二つなさいました。あの時茶店のおばあさんも、くすっと笑いました」
井伏「あのおばあさんは、耳が遠くて聞こえない。笑うはずがないだろう」
修治「（無視して）違うな。三つだ。井伏さんは三つ放屁なさいました」
井伏「（諦め）君には参ったな」

笑う一同。

○ニュース映画
壮大なファンファーレと共に、テロップが現れる。
T「対米英宣戦布告　蹶起せよ全国民」

○（回想）修治の家・玄関外（七年前）
庭に植えてある薔薇に、如雨露で水をやっている修治（３２）。
郵便配達人が入って来て、
郵便配達人「津島さん、郵便です」
と手紙を渡し、去って行く。
修治「ご苦労様」
手紙を開ける修治。
白い紙に印刷された『徴用令書』の文字。
修治、衝撃で顔から表情が失せる。

○（回想）本郷区役所・検査場
成人男性たちが列を作り、検査を待っている。
軍医、前に座っている井伏（４３）の胸に聴診器を当てる。
軍医「はい。吸って」
井伏、息を吸う。
軍医「吐いて」
井伏、息を吐く。
軍医「合格」
肩を落とし、去っていく井伏。
軍医「次」
顔面蒼白の修治が、軍医の前に座る。
軍医、修治の胸に聴診器を当て、
軍医「はい。吸って」
修治、息を吸う。
軍医「吐いて」
修治、息を吐く。
軍医、異変に気付き、
軍医「軽く咳をして」
修治、咳払いをする。

軍医「肺浸潤だな。こりゃ駄目だ」

○東京駅・ホーム

軍服姿の井伏を見送る井伏の家族や友人たち。

修治、井伏の前に立ち。

修治「武運長久をお祈りします」

井伏「ありがとう。君も仕事をしっかりして、家族を守るんだぞ」

修治「はい」

修治、涙を堪えて、

修治「シンガポールか……寂しくなるな」

井伏「君なら美知子さんもいるし、大丈夫だ。頑張れ」

修治「井伏さん、死んだら駄目ですよ」

井伏、笑い、

井伏「まさか君からそのセリフを聞くとは思わなかった」

修治も笑う。

修治「お元気で」

修治、井伏と固い握手を交わす。

（回想終わり）

○修治の家・居間（夜）

通夜が行われている。

葬礼の壇に置かれた修治の遺影。

喪服を着た修治の友人たちが、がやがやと酒を飲んでいる。

井伏は会話の輪に加わらず、じっと修治の遺影を見ている。

弔問客「奥さん、もう一本ビールありますか？　奥さん？」

井伏、部屋を見回し、美知子の姿が無いことに気づく。

○同・庭（夜）

出てくる井伏。

庭を駆け回る白兎と戯れている津島園子（７）と、ダウン症の正樹（３）の兄弟。

その近くで祐子（１）を背負った美知子（３５）が、哀しそうな目で薔薇を見ている。
井伏、美知子の隣に立ち、
井伏「大丈夫ですか？」
美知子「ええ、少し外の空気を吸いたくて。すぐ戻ります」
井伏「彼らなら大丈夫ですよ。酒を飲みたければ、自分たちで何とかしろと言っておきましたから」
美知子「すみません」
井伏、薔薇を見て、
井伏「綺麗な薔薇ですね」
美知子「太宰のお気に入りでした。元々は行商に売りつけられた物なんですけれど」
井伏「ああ、その話なら、彼の小説で読みましたよ。確かあなたが、商人には金のある振りを見せなければ駄目だと、彼を叱ったとか……」
美知子「それは嘘です。私はただ一言、馬鹿ねと申しただけです」
井伏「（笑い）やはりね」
美知子「十年連れ添って分かりました。あの人は、偽りかまことかという人なんだと」
井伏、深く頷く。
美知子、薔薇を見ながら、
美知子「時々考えてしまうんです。もし戦争が起きなかったら、どうなっていたんだろうと……」
井伏、美知子の話に耳を傾ける。
美知子「井伏先生が戦地に行かれてから、あの人は糸の切れた凧みたいにふらふらしてしまって、気づいた時にはもう手の届かない所に行ってしまいました」
美知子、唇を噛み、
美知子「あのまま井伏先生がいてくれたら、太宰は死ななかったものを……」
何と言っていいか分からない井伏。
キリギリスの鳴き声が聞こえてくる。

○ニュース映画
荘厳かつ厳粛な『君が代』の音楽と共に、テロップが現れる。
T「聖断拝す　大東亜戦争終結」

○（回想）商店街・本屋（一年前）
山積みになっている『ヴィヨンの妻　太宰治』という表紙の本。
道行く人々が立ち止まり、次々と手に取っていく。
家族と共に疎開先から帰ってきた井伏（４９）が店の前を通り掛かり、本を手に取る。
嬉しそうに表紙を眺める井伏。
中年男性が本を手に取ると、
井伏「これね、僕の弟子が書いたんです」
中年男性「（訝し気に）はあ」
再び笑顔で本を見る井伏。

○（回想）修治の家・書斎
修治（３８）が机に向かい、小説を書いている。
傍らに置かれている一番上の原稿用紙には、『斜陽　太宰治』の文字。
部屋の障子は破れ、畳の隅は雨漏りで腐っている。
隣の部屋ではお腹の大きな美知子（３４）が、正樹（２）と玩具で遊んでいる。
修治、いたたまれない表情で、疲れ切った妻の顔を見る。
美知子、修治の視線に気づく。
思わず目を逸らす修治。
修治「仕事部屋の方へ出かけたいんだけど」
美知子「これからですか？」
修治「うん。どうしても今夜のうちに書き上げなければならない仕事があるんだ」
美知子「今夜は私、妹のところへ行って来たいと思っているんですけど。あんまり具合が良くないみたいで……」

修治、正樹をちらりと見て、
修治「それならば、誰か人を雇えばいい」
美知子「でも、なかなか来てくれる人もありませんから」
修治「捜せばきっと見つかるだろう。来てくれる人が無いんじゃ無い。いてくれる人が無いんじゃないかな？」
美知子「私が人を使うのが下手だと仰るのですか？」
修治「僕はそういうつもりでは……」
美知子、修治に冷たい視線を送る。
修治「（諦め）……」
修治、机の引出しを開けると中から原稿料が入った封筒を取り出し、それを袂に突っ込む。
そして、原稿用紙と辞典を黒い風呂敷に包み、
修治「行ってくる」
と逃げるように出て行く。

○（回想）同・玄関外
園子（６）と近隣の子供たちが鬼ごっこをしている。
修治、中から出てくると、園子と目が合う。
園子は走るのを止め、修治の顔を仰ぎ見る。
修治も園子の顔を見下ろす。
お互いに無言。
修治、袂からハンカチを出し、園子の鼻を拭いてやる。
園子に背を向け、歩き出す修治。
園子、遠ざかる父の背中を寂しげな目で見送る。

○（回想）千草・店内（夜）
野平（２３）とカウンター席に座っている修治。
修治、コップに入っているビールをぐいっと飲み干し、

修治「どうした？　野平。もっと飲め」
野平「いえ、僕はそろそろ失礼して……」
野平が財布を出すと、修治は制止する。
修治「馬鹿。俺と飲む時は払わなくていいと、何度言ったら分かるんだ」
野平「しかし、こう毎回……」
修治「よく聞け。俺のはつまり、肉体の労働に入らない。それに、作品というものは個人の物ではないんだから、原稿料も俺一人で私有してはいけない」
野平「だからといって、全部を酒に使うことはないでしょう」
修治「野平、俺の実家はな、津軽の小作農の方々が汗水たらして作った米や金を巻き上げ、それを資本に土地を増やしていった。そして、俺は何の苦労も知らず、坊ちゃん坊ちゃんと大事に育てられた。そんな人間は、絶対幸せになってはいけない」
野平「でも、太宰さんのお子さんたちには、幸せになってもらいたいです」
修治、一気に酔いが醒め、黙る。
野平「太宰さん？」
修治「帰る」
修治が立ち上がった瞬間、銀ぶち眼鏡をかけた富栄（２７）が入ってくる。
富栄「太宰治先生いらっしゃいますか？」
修治「太宰は僕だが」
富栄、修治の前に立つと、丁寧に頭を下げ、
富栄「山崎富栄と申します。ミタカ美容院の同僚の今野さんから、先生が弘前高校のご卒業だと伺い、参りました」
修治「君も弘高の出身かね？」
富栄「いえ、私の亡くなった兄が通っていました。山崎年一といいます。ご存じありませんか？」
修治「山崎年一……」
富栄「どんなことでもいいから知りたいんです」
修治「すまない。聞いたことがないな」

富栄「そうですか……ご存じないですか」
修治「お兄さんは戦争で？」
富栄「いえ、脳の病気です。私が九つの時に亡くなりました」
修治「それは気の毒に。力になれず、申し訳ない」
富栄「いえ、こちらこそお邪魔して、申し訳ありませんでした。失礼します」
富栄、修治に頭を下げ、出て行こうとする。
修治「あ、ちょっと」
振り返る富栄。
修治「僕もね、若い頃に兄弟を病気で亡くしているんだ。だから、君の気持ちはよく分かる。どうだい？　僕らと一緒に飲まないかい？　乾杯しよう」
富栄「でも、私なんかが……」
修治「何を言っている。僕なんか、ただの没落貴族さ。緊張することなんてない。さ、ここに座って」
修治、隣の椅子をぽんぽんと叩き、富栄を座らせる。
修治、コップにビールを注ぎ、富栄に渡す。
富栄「私はお水で結構です」
修治「遠慮しなくていい。僕のおごりだ」
富栄「明日仕事もありますし……」
修治「旦那さんには、僕から飲まされたと言えばいいから」
富栄「主人は……マニラで戦死しました」
気まずい沈黙が流れる。
修治「では、なおさら飲むべきだ。野平、英霊に乾杯だ」
野平「はい」
修治「乾杯」
コップを掲げ、ビールを飲む修治と野平。
修治「（富栄に）さあ、あなたも」
富栄「……はい。乾杯」
富栄、ビールを飲み干す。

修治「何だ。飲めるじゃないか」
はにかむ富栄。
修治「さあ、もう一杯いこう」
修治、上機嫌で富栄のコップにビールを注ぐ。
その様子を不安そうに見ている野平。

○（回想）千草・修治の仕事部屋
千草の二階。
井伏の前に座っている修治と古田（40）。
井伏「『井伏鱒二選集』ですか」
古田「はい。太宰さんが選ばれた井伏さんの作品を全9巻にまとめ、出版したいと考えております」
修治「あとがきは僕が書かせて頂きます」
井伏「それは願ってもない話だが、流行作家でもない私が出していいものかな？」
修治「何を仰いますか。井伏さんの作品こそ、多くの人に読まれるべきです。僕も井伏さんのおかげで、小説で飯が食えるようになりました。戦争で苦労された井伏さんのためにも、この本を発行したいんです」
井伏、修治の熱意に胸を打たれ、
井伏「ありがとう。よろしく頼みます」
と頭を下げる。
嬉しそうに微笑む太宰。
と、ビールとコップをお盆に乗せ、富栄が入ってくる。
富栄「失礼します」
井伏、訝しげに富栄を見る。
富栄、ビールを井伏の前に置く。
修治「秘書の山崎さんです」
富栄「はじめまして」
警戒しながら、会釈をする井伏。

○（回想）商店街
上機嫌で歩いている太宰。
本屋の前を通り掛かり、店主に声を掛けられる。

店主「太宰先生、こんにちは」
修治「やあ。どうかね？　僕の本の売れ行きは」
店主「お陰様で、飛ぶように売れております。太宰の次の小説はいつ出るんだとお客様たちに叱られ、困っているんですよ」
修治「（笑い）それはすまない。今しばらく待たれよ」
店主「期待しております。志賀直哉の言うことなど気にせず、頑張ってください」
修治「ん？　志賀がどうした？」
店主「え？　ご存じないですか？　こりゃまずいことを言ったな」
修治「おい。一体何のことだ。言え」
店主「困ったなあ」
店主、渋々店頭に並んでいる『文学行動』という雑誌を修治に渡す。

○（回想）千草・修治の仕事部屋
怒りで体を震わせながら、雑誌『文学行動』を読んでいる修治。
見開きのページには、志賀直哉、広津和郎を囲む『現代文学を語る』と題する座談会の様子が掲載されている。
と、ドアがノックされる。
修治、勢いよくドアを開け、
修治「誰だ！？」
富栄が怯えた顔で立っている。
修治「……何だ、君か」
富栄「すみません。出直します」
修治「いや、入ってくれ」
富栄、躊躇しつつも中に入る。
修治、いらだちを隠せず、部屋の中を歩き回る。
富栄「先生、大丈夫ですか？」
修治「（自分に）俺の作品がとぼけているだと？　お前の作品の方こそよっぽどとぼけているじゃないか。人の苦しさなど知らないくせに。自分一人が偉いと思っていたら、大間違いだ」

富栄「あの、私一体なんのことだか……」
修治、雑誌を開いた状態で富栄に渡し、
該当箇所を指差す。
富栄「（読んで）『太宰治はどうです？』、
『年の若い人には好いだろうが僕は嫌いだ。
とぼけて居るね。あのポーズが好きになれ
ない。』」
修治「君もやっぱり僕の小説はとぼけている
と思うか？」
富栄、力強い目で修治を見て、
富栄「とぼけてなんかいません。私は先生の
作品を敬愛しています。私には先生が抱え
ている痛みが分かります」
修治「君も生きているのが苦しいか？」
富栄「ええ、とっても……。戦争中はパーマ
屋の非国民の娘となじられ、父の学校は軍
部に接収、おまけに夫は結婚してすぐに戦
死……」
富栄、悔しそうに拳を握り締め、
富栄「私はこの国に裏切られ、世間に騙され
ました。だから、私には先生の苦しみがよ
く分かるんです」
富栄、まっすぐな目で、修治を見つめ
る。
と、突然富栄を抱き締める修治。
富栄「（どきまぎして）先生？」
修治「僕を助けてくれ」
体が動かない富栄。
修治「死ぬ気で、死ぬ気で恋愛してみないか
？」
富栄「何を仰るんですか？　本当は、こうし
ているのもいけないのに……」
修治「旦那さんのこと、忘れちまえよ。君は
僕を好きだよ」
富栄の鼓動、激しくなり、
富栄「私も……好き。私も死ぬ気で恋愛した
い……」
修治「そうだろう」
富栄「でも、奥様やお子さんに対して、責任
を持たなくてはいけませんわ」

修治「それは持つよ。大丈夫だよ。うちのなんか、とてもしっかりしているんだから」
富栄「（迷い）……」
修治「僕を助けてくれ。頼む。苦しいんだ」
切実な目で、富栄に訴えかける修治。
富栄、視線を逸らすことが出来ない。
キスをする二人。

○（回想）佐藤家・客間
佐藤（５５）、井伏に雑誌『新潮』に掲載されている修治の『如是我聞』を読み聞かせる。
佐藤「（怒りの口調で）『或る「老大家」は、私の作品をとぼけていていやだと言っているそうだが、その「老大家」の作品は、何だ。正直を誇っているのか。何を誇っているのか。まるで無神経な人だと思った。』」
佐藤、雑誌を井伏の前に放り投げ、
佐藤「君はこのことについて、知っていたのか？」
井伏「（戸惑い）いえ、全く……」
佐藤「志賀さんも非常に困惑しておられる。君の方から、掲載を止めるよう太宰に言ってくれないか？」
井伏「はい」
佐藤「まさかまた薬に頼っているわけではないだろうな」
井伏「それは無いと思います。私が先日会った時は、至って普通でしたから。あるとすれば、もう一つの方かと」
佐藤「……女か」
大きく息を吐く二人。

○（回想）千草・店内（夜）
修治と富栄が、他の客たちと「ギロチン、ギロチン、シュルシュルシュ」と出鱈目な歌を歌いながら、箸でコップを叩いてリズムを取っている。
と、井伏が顔を強張らせて入ってくる。
修治「おお、井伏さんじゃないですか！　ど

うしたんですか？　一緒に飲みましょう」
井伏、表情を崩さず、
井伏「ちょっと話がある。外に出よう」
富栄も立ち上がるが、井伏は目で牽制する。
出て行く井伏と修治。

○（回想）路地裏（夜）
やって来る井伏と修治。
修治「一体何ですか？　中で酒でも飲みながら話しましょうよ」
井伏、修治に対峙し、
井伏「今すぐ『如是我聞』の連載を中止するんだ」
修治、一瞬にして真顔になる。
井伏「先輩たちが、君のことを非常に不安に思っている。君の将来の為にも、ここは我慢すべきだ」
修治「我慢して何になるんですか？　僕が命を懸けて書いた小説が傷つけられているんです。名誉のために命がけで戦うのが、作者の使命です」
井伏「君の気持ちは分かる。だが、雑誌で諸先輩方を批判するのは、良いことではない。人気作家になったからといって、何でも許されるわけではないんだ」
修治「なぜ井伏さんは、彼らの味方をするんですか？　あなたは僕の師匠ではないんですか？」
井伏「だからこそ、こうして忠告しているんだ。奥さんや子供たちがどうなってもいいのか？　家庭の幸福を一番に考えろ」
修治「家族のことは、僕が一番よく分かっています。余計な口出しはしないで下さい」
井伏「だったら今すぐあの女と別れて、家に帰るんだ。結婚の時に僕と交わした約束を忘れたとは言わせんぞ」
修治「……」
井伏「帰ろう」
修治「……嫌です」

井伏「何だと？」
修治「これからは自分のことは自分で決めます。失敬」
修治、踵を返し、去って行く。
井伏「太宰君、待ちなさい」
井伏、修治の肩を掴んで止めるが、
修治「離して下さい！」
井伏、修治の剣幕に驚き、手を引っ込める。
路地の入口に富栄が現れ、
富栄「先生、大丈夫ですか？」
修治「今行く」
修治、よろめきながら富栄の元へと歩く。
富栄、その場に立ち尽くす井伏に、厳しい視線を送る。

○（回想）千草・修治の仕事部屋（夜）
酒をがぶ飲みし、泣きながら原稿用紙に何やら書き殴っている修治。
『井伏鱒二ヤメロといふ』、『私はお前を捨てる』、『ヤキモチ焼き』などの言葉の数々。
修治、『家庭の幸福』という言葉を書き、筆が止まる。
修治「（じっと見つめ）……」

○（回想）修治の家・玄関外（夜）
泥酔し、足元もおぼつかない修治が帰ってくる。
玄関の前で家に入ろうか、入るまいか迷っていると、開けっ放しになった窓から美知子と園子の姿が見える。
園子「お父ちゃんは、なぜお酒を飲むの？」
美知子「お父ちゃんはね、お酒を好きで飲んでいるのではないんですよ。あんまりいい人だから……」
園子「いい人はお酒を飲むの？」
美知子「そうでもないけど……」
園子「お父ちゃんは、きっとびっくりするわ

ね」
美知子「どうですかね。お嫌いかもしれない。
ほら、ほら、箱から飛び出した！」
美知子の幸せそうな低い笑い声が聞こ
え、修治は部屋の中を覗き込む。
修治、床をぴょんぴょんと跳ね回る白
兎の姿を見る。
園子「待て、待てー！」
美知子、園子、正樹が、はしゃぎなが
ら白兎を追いかける。
修治、耐えられず、逃げるようにその
場から立ち去る。
背後から聞こえてくる家族の幸せそう
な笑い声。

○（回想）千草・店内（夜）
咳き込みながら、一人寂しく酒を飲ん
でいる修治。
店主の鶴巻幸之助（６０）、修治の前
にサクランボの皿を置き、
鶴巻「果物屋の親父からです。どうぞ」
修治、サクランボをつまみ上げ、ぼん
やりと眺める。
と、後ろのテーブル席に座る客が、
客「桜桃か。子供に持って帰ってやろうかな。
喜ぶだろうなあ」
修治、サクランボをまずそうに食べて
は種を吐き、食べては種を吐きを繰り
返す。
そのうちに涙が出てくる。
鶴巻「先生、どうしました？」
修治「涙が出るほどまずい桜桃だ」
鶴巻「お嫌いとは知らず、失礼しました」
鶴巻、皿を下げようとするが、
修治「いや、いい。食べる」
鶴巻「（憮然と）はあ」
修治、再び泣きながらサクランボを食
べ、種を吐く。

○（回想）同・修治の仕事部屋

酔って寝ている修治。
その顔を、横で寝そべっている富栄が見つめている。
修治、目を覚まし、富栄に気づく。
修治「何だ。いたのか」
富栄「私はいつでも先生の傍にいます」
修治「仕事の時間じゃないのか？」
富栄「辞めました」
修治「辞めた？　どうして？」
富栄「こうしてあなたのお傍にいるのが、私の務めだからです」
修治「妻や子供と別れて君と一緒になってみても、周囲からの攻撃は、君を一層苦しい立場にするよ。それでもいいのかい？」
富栄「いいえ、そんなこと、私にはできません。奥様に申し訳ありません。私はこのままでいいんです」
修治「（安心し）そうか……嬉しいよ」
富栄「先生は暗闇にいた私を救ってくださいました。私はあなたと共に生き、共に死にます。私には先生しかおりません」
修治「（微笑み）おいで」
修治、富栄を抱き寄せる。
その時、戸がノックされ、
鶴巻の声「先生」
修治、だるそうに立ち上がると、戸を開ける。
鶴巻が立っている。
修治「何だ。後にしてくれ」
鶴巻「奥様がいらっしゃっています」
狼狽する修治と富栄。
修治、慌てて窓の外を見る。
店の前に立つ美知子と子供たちの姿。

○（回想）同・店内
座敷で遊んでいる園子と正樹。
祐子を背負った美知子と修治が、カウンター席に座っている。
目を丸くして、税務署からの通知書を見ている修治。

美知子「（困惑し）去年の所得が二十一万円で、所得税が十一万円なんですって」
修治「何かの間違いだ。どうして稼ぎの半分を持っていかれなければならんのだ。ふざけている」
美知子「では、どうするおつもりですか？」
修治「どうするもこうするも、払えるわけがないだろう」
美知子「そんなこと言ったって、無視するわけにもいかないでしょう」
修治「俺は毎日酒と煙草で莫大な税金を納めているんだ。その上十一万も税金をかすめ取ろうとするなんて、そんな馬鹿な話があるか。俺はびた一文だって払わんぞ」
美知子「あなたはそれでいいかもしれませんけど、私や子供たちはどうなるんです？あの子たちが路頭に迷っても構わないんですか？　死んでもいいんですか？」
修治、無邪気に遊ぶ園子と正樹を見る。
美知子「こんなことになるなら、小説なんて売れない方が幸せでしたね」
美知子、涙を袖で拭く。
修治「……分かった。何とかする。とにかく税務署に行って、再審査が可能か聞こう」
美知子「はい」
修治、呆然自失で通知書を見つめる。その様子を階段から身を隠し、見ている富栄。
富栄「（辛い）……」

○（回想）同・修治の仕事部屋
激しく咳き込みながら、原稿を書いている修治。
その背中をさする富栄。
富栄「少し休んで下さい」
修治「（呟いて）家庭の幸福……家庭の幸福……」
修治、気力を振り絞り、原稿用紙に字を綴っていく。
『死にたい、死ななければならぬ、生

きているのが罪の種なのだ。』の文字。
激しく咳き込む修治。
原稿用紙に滲む血。

○（回想）井伏家・書斎
雑誌『展望』に掲載されている『人間失格　太宰治』と題された小説を読んでいる井伏。
井伏、本を閉じ、苦悶の表情で眉間を押さえる。
と、節代が入ってきて、
節代「古田社長がお見えになりました」
井伏「古田さんが？　打合せは今日じゃないはずだが」
節代「ええ。でも、どうしてもお話したいことがあるとか……」
井伏「（何だろうと）……」

○（回想）同・客間
切羽詰まった顔で、井伏の前に座っている古田。
古田「今このままの状態では、太宰さんの健康が危ないです。どうか彼を助けて頂けませんか？」
井伏「そんなに悪いんですか？」
古田「ええ……医者も長期治療が必要だと言っているんですが、言うことを聞いてくれません。もう井伏さんしか頼れる人はいません」
井伏「しかし、僕も太宰君とはしばらく顔を合わせていませんし、今更僕が彼に治療を勧めても、煩わしいだけでしょう」
古田「そこを何とかお願いします。私の計画には、どうしても井伏さんのお力添えが必要なんです」
井伏「計画とは何ですか？」
古田「井伏さんには、あの富士山が見える茶屋へ、太宰さんを連れて行って頂きたいんです。そして、そこで一か月ほど太宰さんと一緒に滞在して頂きたい。原稿なんか書

かないで、真に静養だけしてもらいたいんです」
井伏「小説を書くことだけが生きがいの人間に、果たしてそんなことが出来るでしょうか」
古田「私も月に三回ずつ、背負えるだけ物資を背負って、お二人を訪ねます。太宰さんのために、どうかお願い致します」
古田、井伏に深々と頭を下げる。
井伏、じっと考えて、
井伏「分かりました。やってみましょう」
古田「ありがとうございます」
古田、がっちりと井伏の手を握る。
さえない表情の井伏。

○（回想）千草・二階廊下
井伏が階段を上がってきて、修治の仕事部屋の前で止まる。
部屋の中から、太宰が辛そうに咳き込む音が聞こえてくる。
井伏、躊躇しつつもドアをノックする。
富栄の声「（中から）どちら様ですか？」
井伏「井伏です」
ドアが半分ほど開き、富栄が顔を覗かせる。
井伏「太宰君に会いたいのですが」
富栄「先生は今お休みになっています」
井伏「すぐ済みます」
富栄「後でまたお越し下さい。失礼します」
富栄、ドアを閉じようとするが、井伏は手で押さえて止める。
井伏「少しの間でいいんです」
富栄「先生は具合が悪いんです。お引き取りください」
睨み合う二人。
修治の声「開けなさい」
富栄、渋々ドアを開ける。
布団で寝ていた修治が起き上がり、ドアまでやって来る。
一見して分かるほど顔色が悪い。

修治「（井伏に）外で話しましょう」
富栄「でも、お体が……」
修治「心配するな。すぐ戻ってくる」
修治、井伏と共に、階段を下る。
心配そうに修治を見送る富栄。

○（回想）玉川上水に掛かる橋
橋の欄干に手を掛け立っている井伏と修治。
修治、下を流れる川を覗き込み、
修治「井伏さん、御存じですか？　この川は人喰い川というんです。入ったら最後、もう死体は絶対にあがらないそうです」
井伏、咄嗟に修治の袖を掴む。
修治「冗談ですよ」
井伏、パッと手を放し、
井伏「これだけ冗談が言えるなら、まだ死なないな」
修治「いい小説が書けるまでは、死ねませんから」
井伏「そうか。君の『ヴィヨンの妻』は良かったと思うがね」
修治「（照れて）あんなものはいい加減ですよ」
井伏「いや、君らしくて、実に素晴らしかった。特に最後の一文が良かったね。『人非人でもいいじゃないの。私たちは……』」
と井伏が言いかけたところで、
修治『『生きていさえすればいいのよ。』』
井伏「うん。そうだ。生きていさえすれば、何だってできる」
修治「小説を書くことと酒を飲むこと以外に、僕に何が出来るのでしょうね」
井伏「また旅行にでも行って、ゆっくり考えればいいじゃないか。あの時みたいに」
修治、遠くの方を見て、
修治「実は最近よく思い出すんですよ、あの富士を。あれは良かったなあ」
井伏「（しみじみと）うん。良かった」
修治「東京のアパートの窓から見る富士は、

どうしてあんなに苦しいんでしょうね」
井伏「きっと君には、東京は小さすぎるんだよ」
修治、フッと笑い、
修治「そうかもしれませんね。もっと早く気づいていれば良かった」
井伏「どうかね。私と一緒に、またあの茶屋に行かないか？」
修治、しばらく考え、
修治「少し時間を下さい。今新しい小説を書いているところなんです」
井伏「しかし――」
富栄の声「太宰先生！」
井伏と修治は、少し離れたところに立っている富栄の姿に気づく。
修治「行かなくては。看護婦に叱られる」
井伏「またすぐに会えるかね？」
修治「今度は私が伺います。久しぶりに将棋でも指しましょう」
井伏「（嬉しそうに）そうだね」
修治「では」
修治、富栄の方へと歩き始めるが、すぐに立ち止まり、
修治『『グッド・バイ』』
井伏「？」
修治「（振り返って）僕の新しい小説です。『グッド・バイ』」
井伏に会釈し、去って行く修治。
井伏、だんだんと遠くなっていく修治の背中を見ながら、
井伏「津島君！」
修治、立ち止まり、井伏を見る。
修治の目に光る涙。
修治が井伏の元に戻りかけた瞬間、
富栄「太宰先生！」
修治、ハッとして、止まる。
そして、井伏に深々とお辞儀をすると、
富栄の元へと歩き出す。
富栄、修治に駆け寄ると肩を貸し、共に去って行く。

井伏、肩を落とし、修治たちとは反対の方向へと歩き出す。

（回想終わり）

○修治の家・居間

修治の告別式。

しめやかに読経が行われている。

× × ×

読経が終わり、葬儀司会者が立ち上がる。

葬儀司会者「ただいまより弔辞を頂戴いたします。ご参列頂きました皆さまの代表を務めて頂きます井伏鱒二様より、故人へのお別れの言葉を頂きます」

井伏、立ち上がると祭壇前に進み、僧侶や遺族、参列者、修治の遺影に対して一礼をする。

そして、弔辞を取り出し、遺影に向かって読み上げる。

井伏「太宰君は自分で絶えず悩みを生み出して自分で苦しんでいた人だと私は思います。四十才で生涯を終わったが、生み出した悩みの量は自分でも計り知ることが出来なかったでしょう。ちょうどそれは、たとえば岡の麓の泉の深さは計り知り得るが湧き出る水の量は計り知れないのと同じことでしょう。しかし元来が幅のせまい人間の私は、ただ君の才能に敬服していましたので、はらはらさせられながらも君は悩みを突破して行けるものと思っておりました。しかしもう及ばない。私の愚かであったために、君は手まといを感じていたかもしれません。どうしようもないことですが、その実は恥じ入ります。さようなら」

井伏、涙を堪え、遺影の中の修治をじっと見る。

○禅林寺・境内（二か月後）

蝉がけたたましく鳴いている。

井伏、『太宰治』と刻まれた墓石に、

サクランボを供える。
手を合わせ、じっと目を閉じる。
佐藤の声「いい色の桜桃だ」
後ろを振り返る井伏。
手桶と花を持った佐藤が、井伏の後ろに立っている。
井伏「来て下さったんですか。太宰君も喜びます」
佐藤「太宰が夢枕に立って、一人で寂しいから来いと言うんだ。君も呼びつけるとは、わがままな奴だ」
井伏「何しろ寂しがり屋な男ですから」
佐藤、墓石に花を供え、
佐藤「太宰も君のような友人を持って、幸せ者だな。死んでもこうしてちゃんと世話してくれるんだから」
井伏「どうでしょうか。彼にとっては、ありがた迷惑かもしれません。私は所詮悪人ですから」
佐藤、突然笑い出し、
佐藤「本当に君は真面目な男だな。あんな遺書を真に受ける人間がどこにいる」
井伏「しかし……」
佐藤「太宰がどんな男だったか、君ならよく知っているだろう。右と言えば左、西と言えば東、そんな人間が、「井伏さんには長い間いろいろ御世話になりました。ありがとう」などと正直に書くと思うか？　それにもし太宰が君のことを本気で悪人と感じていたとしたら、井伏鱒二は悪人なりなどと、そんな単純な気の利かない言い方で満足するはずがない」
佐藤、墓石を見て、
佐藤「確かに君は、死にたくてしょうがなかった太宰を結婚させ、可愛い子供達まで作らせた悪人だ。だが、裏を返せば、君はとっくに死んでいたはずだった太宰の夢を叶え、家庭の幸福まで与えた善人だ。悪人は、太宰から君への最高の誉め言葉だよ。（墓石に）違うか？　太宰」

佇む墓石。

佐藤「きっと太宰は僕が余計な解説をして、憤慨しているだろうな。本当の悪人は、この佐藤春夫だ」

笑う佐藤。

井伏、笑顔で修治の墓石を見る。

○井伏家・書斎（夜）

机の上に置かれた新聞を見る井伏。

井伏、『井伏さんは悪人です。』と殴り書きされた遺書の写真を見る。

× × ×

（フラッシュ）

苦楽を共にした修治との日々の思い出が、次々と現れる。

× × ×

井伏、修治の遺書の写真を見ながら嗚咽する。

○天下茶屋・外

バスが停まり、乗客たちが降りてくる。

最後に井伏が降りると、バスは去っていく。

井伏、目の前にそびえ立つ雄大な富士山を見る。

こぼれる笑み。

その後ろ姿を見守るように、一輪の月見草が咲いている。

〈了〉

〈参考資料・引用〉

『もの思う葦』太宰治（新潮社　２００２）
『回想の太宰治』津島美知子（講談社　２００８）
『矢来町半世紀　太宰さん三島さんのこと、その他』野平健一（新潮社　１９９２）
『太宰と井伏　ふたつの戦後』加藤典洋（講談社　２０１９）
『太宰よ！４５人の追悼文集：さよならの言葉にかえて』（河出書房新社　２０１８）
『回想　太宰治』野原一夫（新潮社　１９８０）
『小説　太宰治』壇一雄（岩波書店　２０００）
『ピカレスク　太宰治伝』猪瀬直樹（文藝春秋　２００７）
『太宰治』井伏鱒二（中央公論新社　２０１８）
『師・井伏鱒二の思い出』三浦哲郎（新潮社　２０１０）
『井伏さんの横顔』河盛好蔵編（彌生書房　１９９３）
『太宰治と私　激浪の青春』石上玄一郎（集英社　１９８６）
『恋の蛍　山崎富栄と太宰治』松本侑子（光文社　２００９）
『人間太宰治』山岸外史（筑摩書房　１９８９）
『明るい方へ　父・太宰治と母・太田静子』太田治子（朝日新聞出版　２００９）
『井伏鱒二対談選』井伏鱒二（講談社　２００）
『井伏鱒二聞き書き』萩原得司（青弓社　１９９４）
『井伏鱒二　サヨナラダケガ人生』川島勝（文藝春秋　１９９４）
『定本　佐藤春夫全集〈第２３巻〉評論・随筆（５）』佐藤春夫（臨川書店　１９９９）
『雨の玉川心中』山崎富栄（真善美研究所　１９７７）

『太宰治全集』太宰治（筑摩書房　１９９９）
『新潮日本文学アルバム１９　太宰治』（新潮社　１９８３）
『新潮日本文学アルバム４６　井伏鱒二』（新潮社　１９９４）
『荻窪風土記』井伏鱒二（新潮社　１９８７）
『人間　壇一雄』野原一夫（新潮社　１９８６）
『玉川上水情死行』梶原悌子（作品社　２００２）
『清水町先生　井伏鱒二氏のこと』小沼丹（筑摩書房　１９９２）
『太宰治文学アルバム　女性編』長篠康一郎（広論社　１９８２）
『太宰治　結婚と恋愛』野原一夫（新潮社　１９８９）
『太宰治　人と文学』野原一夫（リブロポート　１９８１）
『太宰治　武蔵野心中』長篠康一郎（広論社　１９８２）
『太宰治の手紙　返事は必ず必ず要りません』太宰治　小山清編（河出書房新社　２０１８）
『太宰治研究』小山清編（筑摩書房　１９５３）
『太宰治の年譜』山内祥史（大修館書店　２０１２）
『山のある家　井戸のある家』津島祐子（集英社　２００７）